平成２２年度　成果と課題

それぞれの授業の研究協議と、研究の反省をもとに、成果と課題についてまとめる。

（1）「切実な問題」について

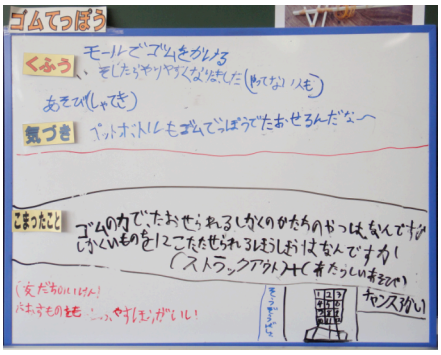
成果としては、「切実な問題」を入り口にして、見とり、発問、板書等、様々なことを授業者が深く考える必要があることを、昨年以上に共通理解できたことがあげられる。

一方で、授業研究で多く話題にあがったことは、「教材分析」についてである。教師が、その教材を深く、そして細かく分析していなければならないということである。しかし、その教材分析が甘く、「なぜ、そのような授業を構想したのか。」を授業者自身が明確にできていないことが見受けられた。このことにより、教科や単元の特性、さらには地域の特性と子どもの背景をふまえた「見とり」を行わなければ、「本気で考える問題」が生まれないことがはっきりした。今後の大きな課題となった。

（2）学習形態について

どの学年でも、全体、グループ、ペアなどの学習形態を、授業者が積極的かつ意図的に組み込むことにより、学年があがるにつれ、「友だち同士での学び合い」を子どもが実感できていることがわかった。これは、継続的な研究による大きな成果と言えるだろう。

しかし、その学習形態を「なぜ行うのか」という部分で、授業者はもっと意図的に行う必要があった。グループで何かを行うことが「ひびき合い」ではないので、授業者はこの点をさらに意識する必要がある。また、ペアやグループでの交流を行った後、そこからどうするかを念頭に入れなくてはならない。



（3）子どもの変容について

継続的な研究により、「教えてもらう」学習から、「自分たちで問題を解決する」学習スタイルが、子ども達の中に定着した。また、自分や友だちの考えを比較したり、友だちの考えを積極的に取り入れたりする姿が、多く見られるようになった。また、学習の過程で、友達と「関わり合う」ことがごく自然なものとなっている。これらは、全ての授業者が、同じ目標に向かって、継続的に学級経営を行ってきた成果と言えるだろう。